

## 「巴」(ともえ)について

絶世の美女でありながら、武名も轟かせた巴御前。戦場でも愛する木曾義仲のそばで戦いながら、その最期には立ち会うことを許されず、形見を持って木曾に下っていきました。義仲を想う気持ちは、死してなお変わることはなく、僧に供養を頼みます。

美しい女武者姿と切ない女心を描いた名曲。上演時間は70分ほどを予定しています。

※巴御前・義仲の乳人、中原兼遠の娘、樋口兼光・今井兼平の妹で、源義仲の妾。

## ○舞台展開

ワキ・ワキツレ[木曾の僧]が現れ(次第)、都に上る途中、栗津の原に立ち寄り→前シテ[里女]が現れ神事に向かう→ワキ、神前で涙を流す女を不思議に思い声を掛ける→女は故事を引き、神前に涙を流すことは不思議ではないと答え、栗津の原の神が木曾義仲であると教える→日が傾くと女は姿を消す→アイ[所の者]がワキ尋ねに応じて義仲と巴のことを語る→ワキが夜もすがら読経をする(待謡)→後シテ[巴御前の霊]が現れ、女であるがために最期をともにすることを許されず、今も成仏できないことを語る→長刀を手に戦った様子や、義仲が自害したことを語る→義仲の形見を持ち木曾に帰ったときの様子を見せ、この執心を解くよう僧に頼み姿を消す。

## 「巴」をご覧になる上でのポイント

## ① 能面

同一人物なので、原則、前後半同じ面を掛けます。ただし、後半女武者であることを強調するため、キリッとした表情の面に変えることもあります。一番年若い小面(こおもて)か少し落ち着いた増(ぞう)のどちらを使っても良いことになっていますが、当日の初番「老松」に小書(特殊演出)が付き、普段出ない天女が出ることになるので、そちらとの兼ね合いを考えながら決めようと思います。

## ② 装束・小道具・作り物

前シテは唐織着流しという最もポピュラーな女性姿です。頭は鬘(かづら)という長い髪を後ろ一つ結びにし、鬘帯(かづらおび)というリボン状の飾りをつけます。体は、内側に薄手の着物で、金箔や銀箔で模様を描いた箔(はく)を着込み、上に唐織(からおり)という能装束の中で最もゴージャスな装束を着ます。腰のところが唐織紐という絹の組紐で締めますが、女構といって左手で身頃を押えた構えをします。

手に持つ物は、右手に中啓(ちゅうけい)という扇を持ちます。本曲では開きません。

後シテは頭に梨打烏帽子(なしうちえぼし)という武士の役が付ける烏帽子を着けます。この折れ方が右か左かで源平を表します。さて源氏方である巴はどちら折れているか、当日ご確認ください。上半身を見てみると、箔は前後共通ですが、唐織は変わります。壺折(つぼおり)といって、ガウンのようにゆったりと来ます。他にも壺折で着付ける場合がありますが、本曲の場合、甲冑姿を現します。この壺折にはゆったりした着方とややびったりした着方があり、紐の留め方が変わってきます。後程記すとおり、最後に舞台上で自分で脱がなくてはいけないため、巴の場合は必ずゆったりとした着方になります。下半身は緋大口(ひおおくち)といって赤い大きな袴をはきます。後ろが畝状になっているのが特徴です。

おそらく一番目をひくのが、右手に持った長刀(なぎなた)でしょう(能では薙刀という表記はせず、長刀で統一しています)。長刀を使うものは、「舟弁慶」「橋弁慶」「熊坂」「鉢木」などがありますが、女姿のシテが持つのは本曲のみです(「正尊」の静御前はなぜか長刀を手に戦います。白拍子のはずなのに…)。本曲の型は、長刀持ちっぱなしと一旦置く型がありますが、師匠からは持ちっぱなしでやるようにと厳命されています。ただ腰かけて持つだけですが、見た目よりしんどいので、ちょっと心配です…。

最終盤に舞台上で着替える場面(物着)があります。義仲はこの世を去り、遺言のとおり木曾に帰るとき、甲冑を脱ぎ捨てる態になります。具体的には、太刀を捨て、唐織を脱ぎ、梨打烏帽子を取り、白い水衣(みずごろも)という薄手の衣を羽織り、右手に笠、左手に形見の小サ刀(ちさがたな・詞章では小太刀と言っています)を手に持ちます。このあたりは涙腺を刺激される名シーンですが、能面で視野が限られたなかで細かい着替えをするのは至難の業で、舞台上からするとトラブルが起こりやすい難所でもあります。

### ③ 謡

きわめてざっくりいうと、能のセリフのことを謡といいます。能という舞や囃子が入らない、謡だけで一曲を通すことを素謡(すうたい)といいます。江戸時代では寺子屋での必修科目となるなど、広く親しまれてきました。様々な歴史や地理、文学知識・表現が含まれることから教材にはもってこいだったのでしょう。現代にも再びそうした動きがあればいいのに…と常々考えています。

薪能や広いホールなど特殊な会場以外では、マイクを使うことはありません。静かな場面であっても、面を通してもしっかり聞こえるような声で、また囃子が入って賑やかな場面でもそれに負けないような声を出さなくてはなりません。

謡はすべて古語である上、独特の節回しで謡うため一度耳で聞いただけで意味を理解するというのは至難の業です。全詞章を添付致しましたのでご参照いただければと思います。なおこれに関してひとつお願いが。出来ましたら先に目を通しておいていただいて上演中は確認程度にしていいただければと思います。

ご覧になった方から謡の意味がよくわからないと言われることがしばしばあります。確かに詞章をご覧いただくと、序詞・掛詞といった古典の授業で習った技法が多く含まれ難解な部分が多いかと思えます。しかし能のストーリーというのは至極簡単で、筋の展開を楽しむというより、動き、音、間といった僅かなものの積み重ねを流れとして体感していただけることが、能を「楽しむ」近道なのではないかと思っています。能にはここは必ずこう意味するとか、こう感じなくてはいけない、というような制約は全くありません。例えば絵画を見るように、ご自身の感覚を目一杯に開いてご覧いただいて、終わったあとに何かが残りましたら、演者としては嬉しい限りです。

### ④ 所作

序盤は静かに進みます。舞台に入ると、座って両手指を前に伸ばして触れ合わせる型をしますが、これを合掌といふ文字通り手を合わせる意味になります。前半の最後に「暮れてゆく日も」という謡の際に地謡の方向を向きますが、これは舞台上の西を意味します。流儀によっては真逆の幕の方になることもあります。

後半は長刀を手に激しい型の連続…と思いきや、意外と戦いの場面は短いです。勿論、敵を引き付け、一気に遙か彼方へ追いやってしまうところ(舞台上では橋掛かりまで行きます)や、鼈桶(かずらおけ)に座り、馬に乗った所作などは見どころですが、義仲を想う、女らしい細やかな所作にも是非ご注目ください。

### ⑤ 囃子

能の囃子は笛・小鼓・大鼓・太鼓の四拍子があります。本曲の場合、太鼓は入りません(大小物といひます)。謡と囃子は一見するとそれぞれ勝手にやっているように見えるかもしれませんが、実は拍数などがかなりキッチリ決まっています。ヨーとかホーといった掛け声は声楽的な要素以外にその拍数をお互いに確認し合うためでもあるのです。その中でさながらジャズのように、それぞれが自分の主張を出しつつ、また相手の想いを感じながら舞台は出来上がっていきます。

まずワキは次第(しだい)という囃子で登場します。その後、シテはアシライ出(あしらいだし)という極く静かな演奏で登場します。いつの間にかそこへいたというような、静かなゆったりとした演奏になります。

後シテは一声(いっせい)というリズムにのった囃子で登場し、巴御前であると名乗ります。後半は謡の中で緩急がつき、囃子の掛け声や打ち方に強弱が出ます。一步間違えれば空中分解になりかねませんが、このあたりの地謡との、あるいは囃子方同士の駆け引きをご堪能ください。

\* \* \*

稽古を重ねていけばいくほど、悲しい曲だなと思います。大胆な長刀捌きも要求されますが、反面、わずかな動き、わずかな間を以て細やかな心情を表してかなければなりません。

前半はあまり動きがありませんが、静かに雰囲気を作っていきます。後半は視覚的にも、聴覚的にも、そして心情面でも大きく変化していきます。長刀を持って勇ましく動く型はあるものの、この曲は本当に謡、特に地謡が命です。後半のシテ謡は登場してから3句、その後3句、あとは1句がときどきあるだけなのですが、地謡はほぼ謡いっぱなし。今回、そのパートナーである地頭(じがしら)には師匠のお父様、流儀の長老でもある高橋汎先生に座っていただきます。後見も大変で、中入での着替えも大変な上、最後に着替えをせねばならないため、通常壺折は唐織紐という絹の組紐で留めるのを太刀を掲げる紐で合わせて留めなければならないなど普段と勝手が変わります。そしてその着替えも謡の中で行うため、手早くかつ静かに行わねばなりません。この後見は主(おも)後見にスペシャリスト横山紳一師、副(そえ)後見に師匠高橋忍先生にお願いしました。ただしどれだけ後見が良くても、シテがうまく動かないことには成功しないので、不器用な私にとってはこの曲最大の難関となります。

さまざまな見どころのある能です。当日を楽しみにお待ちしております！